

## デュルケムと現代フランス社会学

Jean Duvignaud (38年10月10日講演)

一昨年来日され、示唆深い講演をし日本の社会学者に刺戟を与えてくれたジョルジュ・バランディエ Georges Balandier 氏につづいて昨春秋、チュニス大学教授、社会学部長であるジャン・デュヴィニョオ氏 Jean Duvignaud が来日され、日仏社会学の交流のためつくされた。デュヴィニョオ氏はバランディエ氏と大体同じ年輩で、しかもともに碩学ギユルヴィッチ教授の門下の俊英である。今回はギユルヴィッチ教授の推薦によって来日されたのである。東京到着は予定(9月28日)よりおくれ10月2日であったが、東洋大学での講演後10月7日京都に到着、10月13日まで、関西に滞在しその間、京大、関学大、阪大で現代フランス社会学の状況やデュルケムと現代フランスに社会学の関係の問題などについて講演を行った。デュヴィニョオ氏はこの後10月18日、19日鹿児島で開かれた日本社会学にも出席の予定であったがチュニス大学の事情で予定を変更し、帰国された。デュヴィニョオ氏の専門は芸術社会で演劇社会学に関する業績も多いが、フランス社会学の伝統とその発展についても深い造詣を有しておられ、近く「デュルケム」に関する著作を刊行されるということである。同氏の著作年表はこの報告の末尾に掲載した。

関学での講演は「デュルケムと現代フランス社会学」ということで要旨は次のとおりである。

「デュルケム社会学が現代の社会学にとってもつ意義をみるためには、その重要な概念について検討してみることが必要である。その点から Durkheim の理論の中意義ある概念は 1 連帯, 2 アノミー (無律性), 3 共同意識 Conscience Sociale. 4 分類, 5 実証主義の基礎的方法論の 5 つである。これらの中心的概念が現代社会学とどのような関連をもっているかを明かにしていきたいと思う。(1)機械的連帯と有機的連帯の分類は彼の社会類型論の試みをなすものである。M. Weber は人々の精神的態度に基いて類型設定を試みたが、Durkheim は社会の内的結合の仕方、組織の仕方を基準として類型を設定した。そして機械的連帯と有機的連帯の区別は分化されない同質的な

未開社会と分業に基づく、異質的文明社会の区別に該当するのだが、この機械的連帯という概念は仮設的な構成概念であって、彼は当時の人類学の業績を充分考慮せず、またこれを誤解していた。このため未開社会を近代社会との対比においてのみ捉え、且つまた未開社会自体が彼の仮設によって考えられるほど単純なもの、同質的なものではなかったことを見なかったという二つの誤をおかした。また人間社会の機械的連帯から有機的連帯への発展が不可避であるという彼の見解もまた実証主義の仮定によるものでそこには進化論的な考方が含意されている。そしてそれは事実には照合しないものである。Métreau や Lévi-Strauss は今日の未開社会がいわれるほど単純なものではなく色々の可能性を含んでいることを明かにしている。ただ連帯の区分は社会の組成の仕方の類型設定の試みとして方法論的重要な意義をもっている。また連帯の区分のもつ意義はデュルケムの考えたところにあるのではなく、別のところにあるのであって、近代社会の産業研究(フリードマン)によると大企業内の組織にも機械的連帯はみられる。未開社会においても個性を尊重する有機的連帯が全くないわけではない。したがって両者の区別は認められるにしても、その現実への適応点はデュルケムの行ったものとは異なるのである。

(2)アノミー。これは周知のように「自殺論」の中で明かに叙述された概念である。アノミーとは社会構造の変化によって生ずる混乱状態のことを意味するのである。すなわち、アノミーは個人が従来その内におかれていた伝統の枠が崩壊し、新しい欲望が現れこの欲望の力に対して人が抵抗できなくなった状態を意味するもので、この概念は全く科学的意義を失っていない。特にアノミーは新興の後進国、とくにアフリカなどの諸国において適用される。バランディエのアフリカ研究はそのことをよく示している。

(3)社会意識とトーテミズムの概念、この二つの概念はデュルケムにおいて多くの誤解がなされている。それはデュルケムにおいてこの概念が明確ではないこととそれがたえず発展していることにもよるが、この概念のもつ価値は個人意識が唯一の集合心性 *mentalité collective* に参加していることを認めた点にある。ただデュルケムは集合意識をカント的な精神一般としたため、社会と神、国家と神とを混同するにいたった。そのため社会の原理と説明の原理とが混同して解釈されている。そのよい例は宗教生活の原初形態においてトーテムが一方では集団のシンボルとされながら、他方においては集団的思考とされたことである。この点においては二つの批判がある。その一つはギユルヴィッチのそれで、彼はデュルケムが社会意識を説明の原理としながら同時に説明の対象としたことを批判している。ギユルヴィッチによれば社会意識は社会的実在の一の層であって説明原理とはなり得ないのである。もう一つはレヴィ・ストロス Lévi-Strauss のそれで、それによると「民族学的事実に照らすとトーテミズムは存在しない、それは19世紀の幻想の産物である。デュルケムは直接自分で把握したものでないものを合理化し、非欧洲社会を欧洲的考方とらえたためこのような誤りをおかした、またトーテミズムはオーストラリアに特有であっても未開社会に一般的ではない」ということになる。

(4)社会分類の原理はアノミーとともに今日でも調査研究に有効な概念である。それは社会学年報の中でモスと共同で執筆された「未開的分类の若干の形態」と宗教生活の研究の中で現れているが、デュルケムは個人的経験の範疇である時間、空間、数、力、などは精神の構成物ではなく、沸騰的環境に対応する集合心性の方向づけである。それはまた集団のもつ本来の動態 *dynamisme* が未開社会において時間や空間を組織化する中心的範疇をなしていたことを意味するものである。この原理は今日知識社会学といわれるものの起源になるものであり、今日においても価値を失わず、知識社会学研究において有効性をもっている。

(5)最後はデュルケムの方法論に関してであるが、方法論の中重要な点は次の二つである。一つは社会事実を事物として扱うことであり、もう一

つは社会の全体的把握である。前者は社会的事実を客観的に観察することを意味するのであるが、それは自然科学者がなしたように、社会学者も社会から自ら距離をおいて観察することの必要を強調したものである。デュルケムはここで社会的事実について現象学的接近を試みたのであり、そのことは彼がわれわれが社会についてもつ観念を括弧にいれて、それと現実を関連せしめることを試みていることによってもうかがわれる。

社会が自らに対してもつイメージと現実とを対比させていくというやり方はレイモン・アロン Raymond Aron の研究において活用されている。第二の社会の全体的把握はマルセル・モス、ギユルヴィッチによって踏襲発展されている。特にモスの全体社会現象という概念はその顕著な例で、ギユルヴィッチもこれをうけついでいる。ギユルヴィッチは社会現象の考察においては、たとえそれが部分的事象にすぎない場合においても、それを常に全体と結びつけ、全体の中に再統合することが必要であるということ強調するのである。このようにしてデュルケムの方法論の基本的精神は今日の社会学においても充分活かされ、摂取され、更に発展させられている。

#### 略歴

Jean Duvignaud 氏略歴と業績。

1921年 2月22日 la Rochelle で誕生。

ソルボンヌ (パリ大学) で社会学研究。

1943—45年 兵役。

1947—53年 哲学教授 (リセー)

1954—58年 国立科学研究所研究員 (Centre Nationale des Recherches Scientifiques)

1958—60年 パリ大学社会学助手。

1960年以降 チュニス大学文学部教授、社会科学研究業績。所長

1955年 舞台の広さについての研究。(Cahiers Internationaux de Sociologie)

1956年 美的感情の現象経験。(Journal de Psychologie)

1957年 俳優の社会学についての考察。(Cahiers Internationaux de Sociologie)

1959年 芸術社会学の諸問題。(同上)

1961年 19世紀における演劇発展についての考察。(同上)

以上の外文学活動にもすぐれたものがあり、小説などの創作活動もきわめて活潑であって、Nouvelle Revue Française に発表したもの、単行本も多いが、社会学とは直接関係がないと思われるものらしく、それらについてはここでは割愛した。

(小関藤一郎記)